

全国高校サッカー

サッカーの第103回全国高校選手権最終日は13日、東京・国立競技場で決勝が行われ、前橋育英（群馬）が流通経大柏（千葉）を退け、7大会ぶり2度目の頂点に立った。延長を終えて1-1で突入したPK戦を9-8で制し

た。第96回大会決勝と同じ顔合わせ。前橋育英は0-1の前半31分に柴野がヘディングシュートを決めて同点とした。一進一退の攻防は延長で決着がつかず、PK戦でGK藤原が相手の8人目と10人目のキックを止めた。県出身の2年生MF平良晟也（美原小一石川・鳴和申中出）は出場しな

った。流通経大柏は前半12分に亀田の得点で先制したが、17大会ぶりの制覇はならなかった。左サイドバックで先発出場し、積極的なプレーを見せた3年生の宮里晁太郎（小塚中出、ウィクサーレ沖縄FCジュニアユース出身）は後半18分に途中交代した。堀越（東京A）の2年生、

三輪が通算5ゴールで得点王に輝いた。

PK9-8で決着

▽決勝
前橋育英（群馬） 1
流通経大柏（千葉） 1
（PK 9-8）
▽得点者【前】柴野【流】亀田（前橋育英は7大会ぶり2度目の優勝）

【評】前橋育英がPK戦までもつれ込む熟戦を制した。序盤の尖勢をはね返し、0-1の前半31分に黒沢のクロスから柴野が合わせて同点に。GK藤原は後半立ち上がり好セーブを見せ、互いに10人が蹴ったPK戦でも2本止めた。

前橋育英 2度目の日本一

PK戦 藤原「俺が止める」



ハイライト

「日本一」の言葉を、前橋育英の選手たちはやっと口にできた。昨夏の高校総体は県大会で敗退。山田監督に「優勝はそんな簡単なことじゃない」と叱られ、軽々しく目標を言うのをやめた。はい上がるという覚悟で戦い抜き「目の前のことに一つ一つ取り組

ってきた結果、日本一は気持ちいい」。石井主将は頂点に酔いしれた。流通経大柏の出足に押され、前半12分に先制を許したが、粘り強くペースを奪い返す。同31分に黒沢が右奥で巧みにマークを外してクロスを送り、柴野が同点とした。互いに譲らず突入したPK戦ではGK藤原が輝く。全員が成功して迎えた8人目で自

身左へのキックを読み切り、指先に当ててセーブ。直後に白井が外したが、守護神は「俺がもう1本止める」と言い切った。言葉通りに10人目で自身右へのキックを止め、優勝に輝いた。プロ入りする実力者が複数いる相手に食らいつき、40年以上の指導歴を誇る監督を「高校生の伸びしろを勉強させてもらった」とうな

「日本一」の代わりに「五つの原則」を合言葉にした。攻守の切り替え、球際、声、ハードワーク、こぼれ球の対応を大事にするというもので、第96回大会で初優勝を果たしたチームを参考にした。口にしなくとも目標から目線を外したことはない。不言の誓いが冬に実った。

前橋育英1流通経大柏PK戦で流通経大柏の10人目のキックを止める前橋育英・GK藤原（国立競技場）

宮里 ゴールへ推進力 流经大柏

流通経大柏の左サイドバックとして、準決勝に続き先発出場した宮里晁太郎は「沖縄の人たちの気持ちも背負いながら戦う」と、積極的な守備からファーストシュートを放つなど、ゴールへの推進力を見せた。しかし、前半31分に、「課題だった1対1の部分が出てしまった」と、守備をする左サイドを突破されて上げられたクロスから同点弾を許した。

後半18分にベンチに下がった宮里は、「このチームでサッカーができないのは寂しい」と準優勝の表彰式で悔し涙を流した。

沖縄を離れて、常勝軍団の門をたたくも、「けがが多く、試合にも絡めなかった」と2年生まではBチームに甘んじていた。それでも地道に技術と体力を磨き続け、同ポジションの選手がけがをしたこと



前橋育英1流通経大柏前半、左サイドからクロスを上げる流通経大柏の宮里晁太郎（右）国立競技場（小笠原大介東京通信員撮影）

でチャンスを得た。「皆から刺激をもらってここまでこられた」とうなずく宮里は、大学でもサッカーを続ける。「課

題の空中戦も磨いて、大学では日本一をとりたいたい」と前を向いた。

（小笠原大介東京通信員）



前橋育英2度目優勝

全国高校サッカー決勝

サッカーの第103回全日本選手権大会が行われ、前橋育英(群馬)が流通経大柏(千葉)を破り、2度目の全国高校サッカー選手権優勝を果たした。決勝は13日、東京都国立競技場で決戦が行われ、7大会ぶり2度目の優勝を挙げた。

の頂点に立った。延長戦の前半31分に味方がヘディングでゴールを叩き、前半12分に先制した。後半はGK藤原が守備を固めた。延長戦でも先制した。延長戦でも先制した。延長戦でも先制した。

目と10人目のキックを止め、ゴールを叩き出した。延長戦でも先制した。延長戦でも先制した。延長戦でも先制した。

【評】前橋育英がPK戦までもつれた試合を制した。序盤の劣勢をね返す、PK戦でも先制した。

「日本一」ようやくやく解禁

「日本一」の言葉を、前橋育英の選手たちはやっと口にできた。昨夏の高校総体は県大会で敗退。山田監督に「優勝はそんな簡単なことじゃない」と叱られ、軽々しく目標を言うのをやめた。はい上がるという覚悟で戦い抜き、目の前のことに一つ一つ取り組んできた結果、日本一は夢が現実になった。

「日本一」の代わりに「五つの原則」を合言葉にした。攻守の切り替え、球際、声、ハードワーク、こぼれ球の対応を大事にするというもので、第96回大会で初優勝を果たしたチームを参考にしている。口にしなくとも目標から目を外してはいけない。不慣れな試合に備えた。

はい上がる覚悟で戦い抜いた。目の前のことに一つ一つ取り組んできた結果、日本一は夢が現実になった。



前橋育英・流通経大柏 前半、攻め込む流通経大柏の宮里暁太郎(21)。(13日、東京都国立競技場) (千葉日報社提供)

宮里(県出身)チームに勢い 流通経大柏・左バック 大舞台先発

○…沖縄出身の宮里暁太郎が左バックで先発出場し、序盤から積極的にシュートを狙うなどチームを勢いづけた。セットプレーではGKと近距離で競り合い、ゴールに迫った。持ち味のロングスローでも見せ場をつくった。何やまれるのは前半12分の失点。左サイドでマークしていた相手と1対1とな

り、巧みな個人技で抜かれ、そのクロスが得点につながった。元々ボランチで今季からサイドバックへ起用された。レギュラー争いが激しいなか、準決勝でも先発出場し、全国の大舞台で懸命にプレーする姿を沖縄の子どもたちに見せた。(大城三太)